

第156回くらしの植物苑観察会 2012年3月24日(土)

「ヤクスギの秘密」

柴崎 茂光(当館研究部民俗研究系)

ヤクスギとは？

九州最南端の佐多岬から南西へ約60kmに進むと、東西28km、南北24kmの屋久島(鹿児島県)があります。島の中心部には、九州最高峰の宮之浦岳(1,936m)や永田岳などの高い山が連なる奥岳がそびえます。中腹の山岳地域には、樹齢1,000年以上の「ヤクスギ」が生育します。とりわけ、胸高直径5.22m、樹齢2,600年以上の縄文杉は、観光客にとって憧れの的となっています。ヤクスギに代表される独特の景観や、暖温帯から冷温帯までの多様な植生が評価され、屋久島は平成5年12月世界自然遺産に登録されました。

なお里で人工林として植林されたスギは、ジスギと呼ばれ、ヤクスギとは区別されています。また、樹齢1,000年に満たない山岳地域のスギはコスギと呼ばれます。

ヤクスギの特徴

かつて林芙美子が「ひと月に35日雨が降る」と表現したように、山岳地域の年間降水量は、7,000mmを超えます。雨が多いことは、スギにとって生育に有利な環境といえますが、土壌は肥沃でないため、ヤクスギの直径成長量は、年間に2～3mm程に過ぎません。ただし、遅い成長のおかげで、テルペン類といった樹脂成分が通常のスギより6倍程度多く含まれています。そのため、一般のスギに比べ腐りにくく、江戸時代に伐採された際に放置された伐根や残材が、未だに林内に腐らずに残っています。これがいわゆるヤクスギの「土埋木」とよばれるものです(写真1)。



写真1 観光利用される土埋木
(撮影:ヤクスギランド)

ヤクスギを利用する

ヤクスギが資源として本格的に利用されるようになったのは、17世紀中盤以降です。朱子学者として伊勢国や琉球王国で指導に当たった屋久島出身の泊如竹(1570～1655)が、奥岳への立ち入りを拒む島民を説得したことが、きっかけだったといわれています。如竹の説得に応じた島民は、以後、年貢としてヤクスギの平木(屋根ふき材)を薩摩藩に納めるようになり、年貢を納めた見返りに、米や大豆などの生活必需品を受け取りました。当時は、真っ直ぐ育ったヤクスギを選び、根元に高いものでは4mに達する櫓を組みました。そして7人がかりで1週間かけてヤクスギを切り倒し、現場で平木割りを行ってから、里に運びだしました。

明治以降に入ってから
も、平木利用は続きましたが、高級材としてヤクスギの価値が再認識されるようになり、欄間や床柱として重宝されるようになります。また、自然保護の流れが強くなるにつれて、ヤクスギの希少性はさらに高まり、林地に放置されてきた「土埋木」が利用されるようになります。

そして昭和 30 年代半ばから、お盆や飾り壺といったヤクスギ工芸品が生産されるようになります（写真2）。



写真2 ヤクスギ工芸品(飾り皿)

ヤクスギ工芸品の魅力

平木の場合には、木目が均質なヤクスギが好んで利用されました。しかしヤクスギ工芸品の場合には、光明が入ったヤクスギや、腐朽菌によって穴の開いたヤクスギに高い価値が見出されるようになりました（写真3）。近年は勾玉など小型の商品に人気が集まっています。

かつては見向きもされなかったヤクスギが、現在はむしろ高額で取引されるという事実は、興味深いものですね。

ヤクスギ関連の資料については、平成25年3月にリニューアルオープンされる第4室展示でも公開されます。そちらの方もどうぞお楽しみに。



写真3 典型的なトラモク模様のヤクスギ

.....
次回予告 第157回くらしの植物苑観察会 2012年4月28日(土)

「佐倉城址の植物観察—春編—」 原 正利(千葉県立中央博物館)

13:30~15:30(予定) 苑内休憩所集合 申込不要